

ほっかいどう

# がいほつグラフ

北海道開発局広報誌

Vol.36

2004 季刊



北海道開発グラフ

通巻第三十六号

二〇〇四年(平成十六年)三月

監修

北海道開発局広報室

発行 財団法人北海道開発協会

〒001-0001 札幌市北区北11条西2丁目 セントラル札幌北ビル  
011-709-5111 FAX 011-709-5115

開発の日々の  
ひとコマ



統内新水路の土砂掘削に活躍する蒸気機関車と掘削機

## 治水工事に活躍した蒸気機関車

土木工事用の機械というと、ブルドーザーやダンプトラック、ショベルカーなどを思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。これらの機械が登場する以前は、蒸気機関車が治水工事に活躍していました。

昭和3年に工事が始まった十勝川統内新水路事業では、エキスカベーター(掘削機)と蒸気機関車、積土運搬車(30輻連結)を組み合わせて、土砂の掘削と運搬に当たりました。最盛期には8セットが稼働し、工事のスピード化に大きく貢献しました。

やがて、さらに効率の良い土木機械にその座を譲ることになりますが、昭和初期において、蒸気機関車はまぎれもなく治水工事の主役でした。

## 春の農村風景 (小清水町)

網走市から知床方面に向かう国道沿いに、国内有数の豊かな畑作地が広がっています。

この一帯では、ジャガイモ、ビート、小麦、たまねぎなどの生産が盛んです。北海道開発局は、この地で生産される作物の収量の増加や品質の向上を目指して、畑地帯総合土地改良パイロット事業を進めています。

長い冬が終わり、肥沃な大地が顔を出すと、地域では一斉に、畑起こしや作物の植え付けなど忙しい作業が始まります。



「北海道開発グラフ」はエコマーク認定の再生紙を使用しています。

しんとう最前線／質の高い衛生管理を目指す漁港づくり

事業紹介／シーニックバイウェイ北海道  
美しい感動に出会う道

特集●貴重な自然遺産を  
将来に引き継ぐ

開発事業のあゆみ／十勝川治水の歴史

～十勝平野を潤す「水の大樹・十勝川」の治水～

ピックアップ／道東を中心に各地で豪雪

丘珠空港の滑走路がリニューアル

一般国道336号えりも町斜面崩壊

ちやうどちやうど…道の駅／釧路・根室エリアの道の駅

北国賦／もう一つの物語、紙芝居を再び

版画家・絵本作家 佐藤 国男さん

## 湿原をとりまく状況



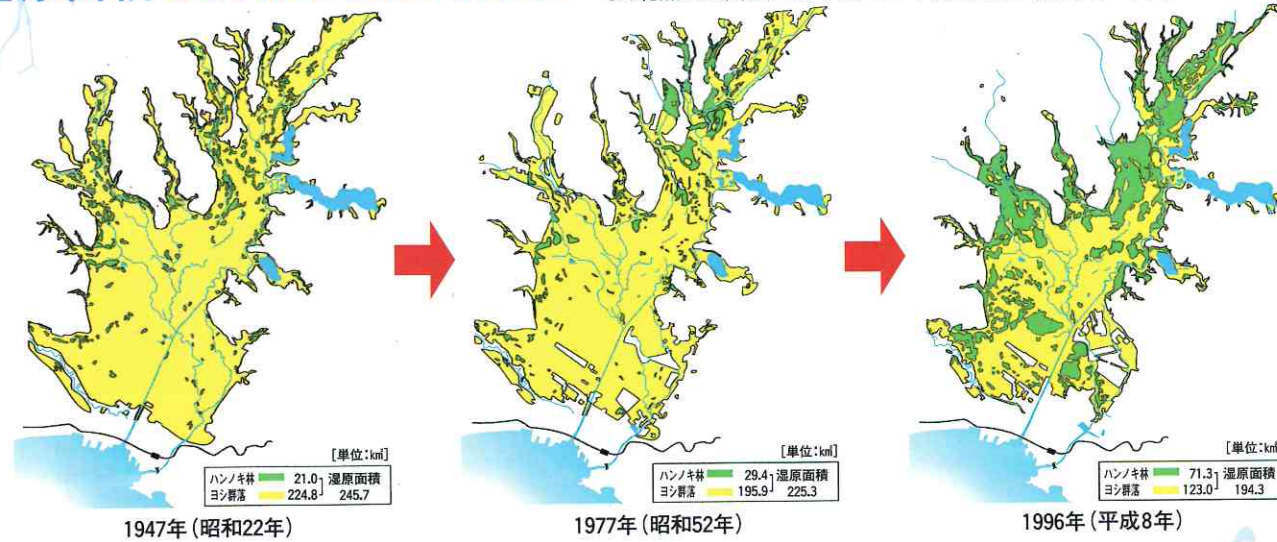
ヒナを育てるタンチョウ

### 釧路湿原の環境変化

釧路湿原は、国内の湿原面積の約6割を占める国内最大の湿原です。今から3、4千年前に誕生し、長い年月をかけて少しずつ変化しながら、タンチョウ、イトウ、キタサンシヨウウオなどの希少な動植物が生息する環境を育んできました。しかし、第2次世界大戦後、湿原の環境は大きく変化します。釧路市周辺では、製紙業、炭坑業や漁業などの地域産業が大きく発展し、また釧路川上流では酪農振興の取組も本格化しました。湿原とその周辺で開発が進められた結果、湿原面積は過去50年で約2割減少。また、かつては湿原に広がっていたヨシ群落が減る一方でハンノキ林の拡大が進むなど、自然の推移を上回るスピードで変化が進んでいます。

### 湿原面積の変化と植生の変化

湿原面積の減少が進むとともに、湿潤した環境で生育するヨシ群落にかわって、より乾燥した環境で生育するハンノキ林の面積が拡大しています。



### 湿原に対する意識の変化

湿原はかつて「不毛の地」とされ、その価値はあまり重んじられていませんでした。しかし、湿原の環境変化が進む一方で、昭和40年代半ばから湿原の価値を見直す動きが現れ、保全と再生に向けて人々の意識は次第に高まっています。近年では、生物の生育・生息環境としてだけでなく、水を保ちきれいにする機能や、二酸化炭素を吸収して地球温暖化を防止する機能についても着目されています。

湿原は「不毛の地」であるという認識

湿原の価値を見直す動き

- ・有志による湿原生態系の調査が始まり、希少価値が次第に明らかに(昭和40年代半ば)
- ・ラムサール条約登録湿地としての指定(昭和55年)
- ・国立公園として指定(昭和62年)

湿原の保全・再生に向けて意識が高まる

## 貴重な自然遺産を将来に引き継ぐ

### ～釧路湿原の保全・再生～

釧路湿原は、自然豊かな北海道のシンボルのひとつです。タンチョウやイトウをはじめとする希少な動物が生息し、また、その独特の風景は訪れる人に安らぎを与えています。一方で、過去50年の間に、自然の推移を大きく上回るスピードで、湿原面積の減少や植生の変化などが進んでいます。このまま放置すれば、近い将来、湿原も貴重な動植物も失われてしまう可能性があります。このため、釧路湿原では、湿原の保全と再生を目指して、地元住民、NPO、自治体、複数の国の機関などの多様な主体が連携する「自然再生協議会」が発足しました。今回の特集では、「釧路湿原の自然再生」に至るまでの経緯とその内容、また、現在の取組について紹介します。



## 「釧路湿原の河川環境保全に関する提言」(平成13年)の要旨

### 目標

当面の目標：湿原の現状を維持

方針1：  
土砂・栄養塩などの  
流入負荷を20  
年前の水準に

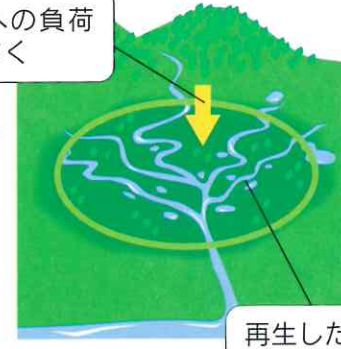


方針2：  
消失した湿原  
の再生

実施  
施策を検討、  
湿原再生の

長期的な目標：1980年当時の環境に回復

湿原への負荷  
を小さく



再生した湿原

急速に釧路湿原の劣化が進んでいることから、2000年現在の状態を維持・保全するため、流域及び河川からの負荷を20年前に戻す

1980(昭和55)年のラムサール条約登録当時の環境へ回復させる

### 施策の実施に当たって

様々な団体の参加と連携



流域住民の理解と協力を得るとともに、各関係機関の強力な連携・推進のもと湿原の保全・再生を進める

### 科学的調査・計画



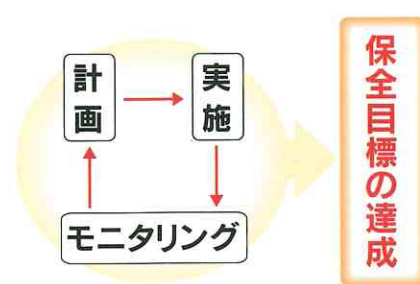
環境変化の要因が何かを科学的に調査し、その結果に基づいて計画を立案

地域の振興につなげる



湿原の保全・再生が地域の振興につながるように取り組む

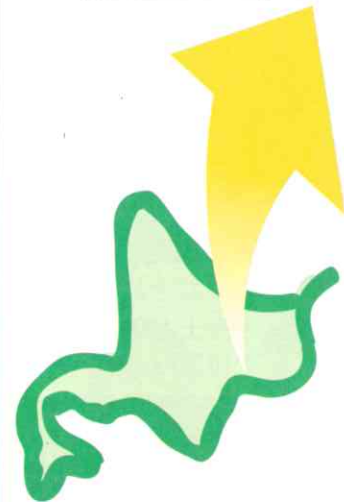
### 順応的管理



自然に対して、段階的に再生策を実施し、予想と異なる結果が出た場合は、手法と計画を柔軟に見直す

### 自然再生を通じた地域情報の発信とイメージの向上

湿原の再生に取り組む地域情報の発信とイメージの向上



自然再生という新しい取組を進める地域として、イメージの向上につなげる

## 釧路湿原の保全・再生に関する近年の主な動き

平成9年

河川法が改正され、「治水」「利水」という河川法の目的に「河川環境の整備と保全」が加えられるとともに、河川整備に「関係住民の意見を反映」させることが盛り込まれる

従来



平成11年

専門家、行政、住民の参加による「釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会」がスタート

平成12年

湿原の保水機能の維持や環境の保全、湿原内の開発の抑制などを目的として、釧路湿原のほぼ全域を河川区域に指定

「釧路湿原川レンジャー」スタート



河川管理の一部を地域住民の協力を得ながら行う「釧路湿原川レンジャー」の活動が始まる。また、アンケートの実施、シンポジウムの開催などを通じて、地域との連携を深める取組も本格化

平成13年

検討委員会が「釧路湿原の河川環境保全に関する提言」を取りまとめ、湿原保全に向けた目標と取組の方向性が明らかに

釧路湿原の保全を目的として、関係行政機関の担当者らで構成するプロジェクトチームが発足

平成15年

・自然再生推進法が施行 ・自然再生基本方針が決定

平成15年  
11月

釧路湿原自然再生協議会スタート



協議会は、地域住民、NPO、自治体、国の機関、専門家などの多様な主体で構成。現在は、「釧路湿原の河川環境保全に関する提言」(左頁)やこれまでの取組を踏まえて、自然再生事業の全体構想について議論を進めている

平成9年、河川法が改正され、北海道開発局では釧路開発建設部を中心に、湿原環境保全に関する取組を始めました。具体的には、地域住民の参加と意見を幅広く募りながら、専門家や関係行政機関

関と保全・管理の方法の検討を行ってきました。こうした取組の中で、釧路湿原の保全に関する多様な主体の連携も次第に深まってきました。

北海道開発局関連の動き

河川・自然環境関連の法律の動き

**再生普及小委員会**

釧路湿原の適正な保全と利用についてや自然再生を活用した環境教育、市民参加、情報の発信・提供について協議します。



ハンノキ林観察の様子

**土砂流入小委員会**

水辺林や土砂調整池により、土砂流入の防止を図るなど、湿原への土砂流入防止に関して協議します。



土砂調整池と水辺林のイメージ

**水循環小委員会**

水環境の保全を図るなど、水質、地下水の動態の把握・評価や、湖沼の再生(※)に関して協議します。



湿原を潤す釧路川の流れ

※湿原の再生、森林の再生及び湖沼の再生には、野生生物の生息環境を修復することが含まれています。

我々「やちの会」は、自然再生事業の中で、市民参加と環境教育のプログラムに積極的に参加します。地元の方や子どもたちが湿原に触れあう機会を多くしたなかで、自然との関わりについてもっと考えるようになっていきたいと思います。

釧路湿原では、自然再生事業が始まりましたが、現段階では市民の関心が高いとは必ずしも言えません。これからも、協議会や住民意見交流会などを通じて、多様な参加者が意見を交わし、議論を進めていくことが必要でしょう。市民とともに進める自然再生をめざしてほしいと思っています。

私は、幼いころからずっと湿原を見てきました。現在も、修学旅行生や観光客の方々に湿原を案内する「やちの会」の活動を通じて、湿原と関わっています。実際に湿原を散策していると、ハンノキが増えたり、川が浅くなったりして少しの雨でも濁ったり増水したりすることに気づきます。湿原の環境の変化は、年々そのスピードを早めているように感じます。



特定非営利活動法人  
釧路湿原やちの会  
事務局長 &  
ネットワーク  
佐藤 吉人さん

市民とともにある  
湿原の再生をめざす

**森林再生小委員会**

植林などにより、保水、土砂流入防止機能の向上を図るなど、森林の再生(※)に関して協議します。



地元小学生による植樹の風景

釧路湿原再生協議会の活動は、ホームページで紹介されています。<http://www.kushiro-wetland.jp>

**湿原再生小委員会**

相対的に地下水位を回復させて湿原の再生を図るなど、湿原の再生(※)に関して協議します。



湿原再生のイメージ

**旧川復元委員会**

釧路川茅沼地区(約2km)で蛇行する河川への復元を図るなど、河川の再蛇行化に関して協議します。



蛇行復元のイメージ。直線部分(写真左)川の流れを旧河川部分(写真右)に切り替えることを検討しています。

**釧路** 釧路湿原自然再生事業の目標は、何かを造ることではなく、湿原環境の悪化の要因を調べ、それを取り除くことで、湿原が自らの力で回復することを手助けすることです。また、これまで人が一方的に利用するだけであった湿原との関わりを見直し、共生する新たな方法・スタイルを見つけるべく、協議会では6つの小委員会を設置し、それぞれが異なるテーマで、湿原再生の保全・再生に向けて具体的な方法や計画のあり方について検討を進めています。ここでは、現在、調査と検討が進められている、それぞれの小委員会の取組について紹介します。

しかし、湿原のメカニズムは、未だに解明されていない部分が多く、自然再生事業そのものが国内でスタートしたばかりということもあって、取り組むべき課題は様々です。このため、協議会では6つの小委員会を設置し、それぞれが異なるテーマで、湿原再生の保全・再生に向けて具体的な方法や計画のあり方について検討を進めています。

# 道の駅

## 釧路エリアの道の駅

神秘的な湖や森、国内最大の湿原など見どころ多彩な道東は、滞在しながらゆっくりと自然を堪能してみたいエリアです。今回紹介するのは、タンチョウの魅力を満喫できる阿寒町の道の駅と摩周温泉の入口に位置する弟子屈町の道の駅。心を潤す湯どころも近くにあります。



## 摩周温泉

[国道241号 弟子屈町]

キメ細かな観光案内で、



観光案内所では四季折々の一番の見どころをアドバイス。弟子屈足湯マップや観光パンフも手に入る

小さいけれど、道東観光の拠点として頼りになる道の駅。国道241号、243号、391号のほぼ合流地点に位置し、神秘的な湖・摩周湖と摩周温泉、阿寒湖、屈斜路湖、



釧路川のほとりに建つかわいい駅舎は「川の駅」とも言われ、駅裏の川岸がカメラの発着所

そして釧路や根室、網走などを周遊するドライバーが立ち寄っています。正確で新しい道路情報や観光情報はもちろん、天候や日程に合わせてドライブコースを考えてくれたり、摩

周湖の展望台と連絡をとって、晴れた日、霧の日、それぞれに湖が美しく見えるポイントを紹介するというキメ細かな対応がうれしい。摩周温泉や川湯温泉にできた新名所、「足湯もいいですよ〜」と、案内人の吉田さん。毎年訪れる旅行者が「また来たよ、って寄ってくるのが楽しみ」なのだとか。気軽におしゃべりができるそんな温かい雰囲気もこの魅力。隣接の「水郷公園」で、パードウォッチングや散歩を楽しんだ後は、「ヨーロッパ民藝館」へも。18~19世紀にかけて実際に使われていた西洋家具や貴重な西洋楽器、古地図が飾られた空間では、なぜか懐かしい気持ちに。



自動ピアノに8種類の楽器がついた珍しい「オーケストリアン」の演奏をぜひ楽しんで、と「ヨーロッパ民藝館」の菅原さん

01548-2-2500

## 阿寒丹頂の里

[国道240号 阿寒町]

タンチョウや湿原のこと、もっと知りたい!!



道の駅で野生のタンチョウが見られるのは11月から3月の間（写真は2月中旬）。タンチョウは春から夏にかけては湿原に戻り、子育てをする

日本では北海道の東部にのみ生息するタンチョウ。ここでは、かつてタンチョウが絶滅の一步手前にまできた時、わずかに残ったタンチョウに餌をやり、保護活動を行ってきた場所です。館内には、木彫の置き物からお菓子まで、タンチョウをあしらった様々な商品が勢揃い。



「マリモ国道」と呼ばれる国道240号に面する道の駅。通路の天井には木製のツルが舞っている

売店の主力商品は、デザインから製作までを手がける木工製品で、おすすめの、タンチョウをデザインした調理ペラやシヤモジは、使い勝手に優れ、お土産にも良さそう。また、濃厚さが特徴のソフトクリームは「練乳みたいな後味で、バスガイドさんにも人気なんですよ」とも。裏手にある「阿寒国際ツルセンター」では、自然に近い状態で飼育されているタンチョウの観察や、映像やパネル、ツルに関するクイズなど工夫を凝らした展示で、タンチョウを詳しく学べます。ぜひ時間をとって、タンチョウの魅力を感じてほしい。向かいには、アウトドアスポーツ施設やキャンプ場のある「阿寒ランド丹頂の里」。ここにはレストランや温泉もあり、四季を通してたくさんの観光客が訪れます。



タンチョウの置き物がいっぱいの館内。タンチョウの卵の形のお菓子も人気商品

0154-66-2969

現在、北海道では、83箇所の「道の駅」が登録されています。快適なドライブの休憩に、レジャーに、個性豊かな「道の駅」をご利用ください。

詳細は、北海道開発局のホームページからもご覧になれます。 <http://www.hkd.mlit.go.jp>



# 最・前・線

開発局と地域を結び、主役はまさに「ひと」。羅臼漁港建設事業所 地域の人々と一緒に考え、行動する。その最前線に立つ姿を紹介します



## 質の高い衛生管理を目指す漁港づくり

釧路開発建設部 羅臼漁港建設事業所

技術主任 鈴木 孝信

羅臼漁港は、3年連続で秋サケの水揚げ日本一を記録するなど、国内有数の水産物供給基地です。安全な水産物の出荷を支えるため、北海道開発局では、環境・衛生管理型漁港づくりを進めています。

羅臼で生活していると、羅臼漁港で水揚げされた新鮮な海の幸が、毎日食卓に上ります。スケトウダラ、秋サケ、昆布、ホッケなど、どれも大変おいしいです。これらは、羅臼ブランドとして有名で、全国各地に出荷されています。

「新鮮な海の幸を、より安全な状態で食卓へ」。これは、私も含め、多くの消費者に共通する願いだと思っています。このことを実現させる手助けとして、私の勤務する羅臼漁港建設事業所では、現在、二つの施設の整備を進めています。

ひとつは、「全天候型ふ頭」という2階建てのふ頭です。羅臼漁港では、漁が盛んな時期になると、漁船や出荷トラックで大変混雑します。新しいふ頭は、混雑を解消して、陸揚げから出荷までの時間を短縮させるものです。さらに、雨、雪や直射日光から水産物を守ることができ、鮮度向上にもつながります。

もうひとつは、羅臼海域の水深150mの低温できれいな海水を、漁港にくみ上げる施設です。くみ上げた海水は、岸壁上での作業や施設の洗浄に使用して、低コストで漁港の衛生管理ができるようになります。

これらの施設が完成すると、羅臼ブランドの価値がさらに向上することも期待されています。

私は、施設整備のための設計や積算、工事の監督を担当していますが、実は、どちらも、防波堤や岸壁のような港の一般的な施設とは異なる部分が多く、なかなか担当者泣かせの施設です。経験のないことはかりで苦労の連続ですが、一方で、自分の仕事が新しいかたちの漁港づくりにつながっているというやりがいも感じてお



完成イメージ図

全天候型ふ頭の完成イメージ（合成写真）ふ頭の2階は駐車場に、1階は屋根付きの作業場となります。直射日光や鳥の糞から水産物を守り、天候を気にせず作業できるようになります。

り、忙しくも充実した日々を送っています。漁港の整備に携わっていると、「漁港の役割」をもっと皆さんに知ってもらいたいと感じます。漁港は、食生活に欠かせない水産物の供給基地として、人々の食生活を支える重要な役割を担っています。

このことをもっと広く伝えるために、漁港をより安全で安心な水産物の供給基地にすることはもとより、多くの人々に足を運んでもらえる空間となるように、これからも取り組んでいきたいと思っています。

（羅臼漁港建設事業所は、平成16年度から羅臼漁港事業所と名称が変わります。）

雪が解けると、サイクリングが楽しい季節の始まりです。  
散歩気分で近所を走るもよし、自然を感じに郊外まで走るもよし。  
手軽に始められ、健康づくりにも役立ちます。  
札幌の市街地を流れる豊平川の河川敷には、サイクリングロード  
が整備され、市民の憩いの場となっています。

さあ、  
でかけよう!!



# シーニックバイウェイ北海道

## ～美しい感動に出会う道～

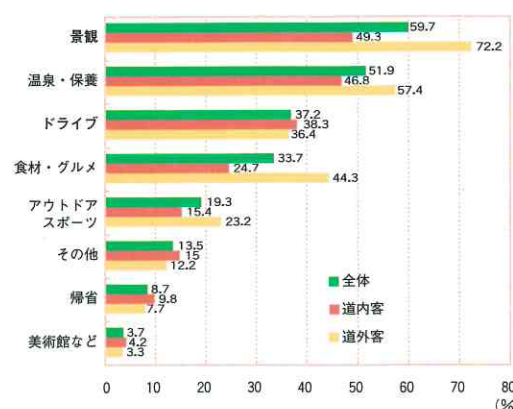


シーニックバイウェイとは、景色や風景を意味するシーンと、脇道を意味するバイウェイから構成されている言葉で、「景観の良い道路」を意味します。現在、北海道では、旭川～占冠（花人街道）と千歳～ニセコ（<sup>はなびと</sup>）のふたつのルートで32の団体が、全国では初めての導入となるシーニックバイウェイ制度を通じて、地域の魅力向上に取り組んでいます。今回は、この制度が始まった背景と、現在進められている取組について紹介します。



### 北海道観光に 求められているもの

北海道は、大雪山系の山々や摩周湖をはじめとするダイナミックな自然景観、富良野のラベンダーや美瑛の丘陵地に広がる農村風景などの美しい景観に恵まれ、国内で最も人気のある観光地です。近年の調査によると、北海道観光で消費される金額は、北海道の農業が生産する金額に匹敵しており、観光は今や北海道の基幹産業のひとつとなっています。近年の特徴として、観光バスによる団体ツアーが少なくなり、マイカーやレンタカーなどを利用した個人ツアーが増えています。旅行目的は、景観、温泉・保養、ドライブなどの人気が高く、特に道外観光客は、ドライブによる景観を楽しむにしている割合が高くなっています。このことから、観光地としての魅力をさらに向上させるには、多くの人々の知恵を生かして、美しい景色や快適なドライブ環境づくりに取り組んでいくことが重要です。



北海道における旅行目的  
(H13.3 北海道開発局資料)

### シーニックバイウェイ 北海道がスタート

北海道観光に対するこのようなニーズを背景として、平成15年度から「シーニックバイウェイ北海道」がスタートしました。

この制度は米国が発祥の地で、国、地域、住民、利用者、NPO等が一体となり、沿道の景観や環境の保全・整備、観光振興を進めるものです。従来の行政主導型の道路整備などとは性質が大きく異なり、地域の人々が進める「美しい道づくり」活動を、行政が側面から助言・支援します。

現在、旭川～占冠（花人街道）と千歳～ニセコの二つのルートで、32の団体が

活動を進めています。

旭川～占冠ルートでの取組を紹介すると、景観、花、体験観光、情報、ユニバーサルデザインなどの5つの分科会が設置され、具体的な活動内容が検討されています。

#### 花分科会

花や樹木による沿道景観の改善及び創出など



#### ユニバーサル分科会

誰もが利用しやすい観光環境の創出など



#### 体験・観光分科会

体験型観光メニューの創出や観光ボランティアの育成など



#### 景観分科会

沿道景観の保全や改善に関する調査・検討など



#### 情報分科会

ホームページやマップによる情報発信など



#### 今後の展開へ期待

「シーニックバイウェイ北海道」は、まだ始まったばかりです。北海道開発局は、今回紹介した活動が、今後さらに活発化して全道に広がり、将来の美しい北海道づくりに繋がることを期待して、活動団体の支援を進めていきます。

地域団体の活動は、ホームページ「シーニックバイウェイ北海道」(<http://www.scenicbyway.jp/>)でも、ご覧になれます。



富良野市



佐藤さんが子供の頃住んでいた東瀬棚(現在の北檜山町)へも紙芝居のおじさんはやって来た。10円の水あめが観覧料。「紙芝居」というものを活用し、神代から伝わる昔話を伝え残さなければ御先祖さまに申し訳ないな」と、少しまじめに考えているという佐藤さん

# もう一つの物語、紙芝居を再び

版画家  
絵本作家  
佐藤 国男

Sato Kunio



丁寧に彫りが施された紙芝居の額も佐藤さんの手によるもの



美濃紙に刷られた「セロ弾きのゴーシュ」の木版画。木目をいかした温かい独自の作風にファンも多い

主な作品 「大男ボルス」(北水)  
「銀河鉄道の夜」(北海道新聞社)  
「セロ弾きのゴーシュ」(ヘネッセ)  
エッセイに 「山猫博士のひとりごと」  
「続・山猫博士のひとりごと」(北水)  
など多数

### Profile プロフィール

佐藤 国男(きょうくにお)  
1952年、北海道瀬棚郡北檜山町生まれ。少年時代から大工や絵描き、考古学者にあこがれる。大工を生業にしながら、25歳の頃より宮沢賢治の世界を木版に彫りつけ、現在、木版画家として活躍。北海道新聞・函館版に木版画とエッセイ「山猫博士のひとりごと」を連載中。はこだて絵本と紙芝居の会の会長も務める。版画を手がけた宮沢賢治の「注文の多い料理店」(英訳)が今年の6月頃、オーストラリアで出版の予定。

で全世界が虚無に打ち負かされそうになった時、月の子(モンテンキント)が少年に想像してこらん。物語を作つてこらん」と諭す情景があつたけれど、現代人は一度、テレビや携帯電話を手離して想像力を高めるために小説でも読んだりラジオドラマにも耳をかたむける必要がありそうです。

中国の雲南に住む文字を持たなかったミャオ族の人々は、自分達の先祖が石器時代に始まり、漢民族に圧迫され、辺境の雲南に逃がれてきた事など幾千年に渡る歴史を口つたえて伝承してきたといひます。

自分達の歴史や言葉を文化として大切に、気の遠くなる程の長い時間守り続けてきた事に感動を覚えます。

「サルカニ合戦」や「かくや姫」によく似た話もミャオ族に伝わっています。ミャオ族の人々が二千年数百年前に漢民族に追われ雲南に逃がれた動乱の時、一部のミャオ族は、彼等の持ついた稲作・金属器文化をたずさえ、海を渡らって日本列島へ逃がれ、弥生文化を起こしたのでしょう。

父から毎晩のように聞いた昔話の多くが、ミャオ族伝来であったことは驚きでした。

ところで最近私は、紙芝居というものの復権を夢みています。宮沢賢治の童話作品をゆつくり、紙芝居に作つていこうと考えています。



「風の又三郎」の木版画

最近ではテレビやビデオが全盛の時代ですが、映像としての作品は既にそれで完成されてしまっているものだからでしょうか、見るものの想像力を刺激するものは少ないようです。

特に最近の視聴率優先の軽薄なテレビ番組の、人々に与える悪影響は大変なものだと思います。

連日のように新聞、テレビで報いられる戦争・親殺し・子殺し等のニュースを見るにつけ、現代は何とも想像力の欠落した時代なのかと暗澹たる気分になります。

エンテの「はてしない物語」の中

最近はずいぶん野原で遊ぶ子供の姿を見かける事はとんとありませんが、私が子供の頃にはわが家にはテレビもラジオもありませんでした。学校が引けると気の合った仲間達と山や川など、屋外で目いっぱい遊び回りました。七人家族で夕ごはんを食べ終えたあとの楽しみといえば、寝物語に父から聞く昔話でした。

レパートリーは十程あって「かくや姫」「一寸法師」「サルカニ合戦」「金太郎」「浦島太郎」などです。

毎晩同じ話を聞き、話の筋はしつかり覚えてしまっているのに、でもまた同じ話をせがみ、その物語を頭の中に映像で描き、いつかその物語の主人公となって活躍している自分がいたのでした。

九つ違いの高校生だった長姉が、アルバイト先から古くなつたラジオをもらつてきた時が、わが家の文明開化元年でした。

チャンネルを回せば、ニュースでも音楽でも落語でもモスクワ放送でも何でもかんでもラジオから聞こえてくるのです。

一番の楽しみはジュール・ベルヌの「海底二万里」やH・G・ウェルズのSFドラマでした。

最近ではテレビやビデオが全盛の時代ですが、映像としての作品は既にそれで完成されてしまっているものだからでしょうか、見るものの想像力を刺激するものは少ないようです。

特に最近の視聴率優先の軽薄なテレビ番組の、人々に与える悪影響は大変なものだと思います。

連日のように新聞、テレビで報いられる戦争・親殺し・子殺し等のニュースを見るにつけ、現代は何とも想像力の欠落した時代なのかと暗澹たる気分になります。

エンテの「はてしない物語」の中



工房内の佐藤さん



# 十勝川治水の歴史

～十勝平野を潤す「水の大樹・十勝川」の治水～

日本でも屈指の大河である十勝川。北海道の屋根大雪連峰の十勝岳を源とし、数多くの支川と合流しながら広大な十勝平野を南下し、17の流域市町村34万人に大きな恵みを与えて太平洋に注いでいます。

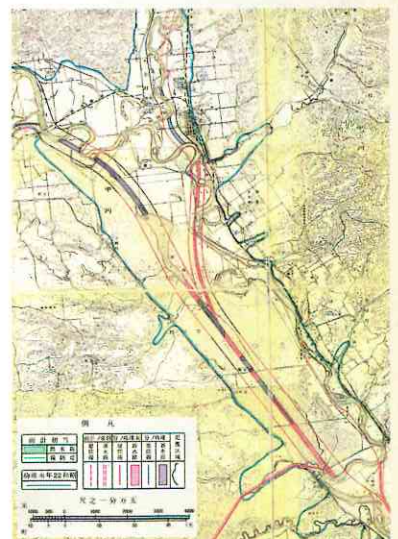
この恵み多き十勝川は、かつては洪水を繰り返し、開拓に取り組む人々に自然の猛威をつきつけてきました。十勝地方の発展の歴史は、洪水とのたたかひの歴史でもありました。



**人力積込馬トロ運搬**  
人間が掘り、馬がトロッコを引き土砂を運搬するこの方法は、戦前戦後を通じて最も長い歴史を有しますが、土木機械の登場で昭和30年代前半で姿を消しました。



**十勝川の渡船**  
開拓当初の十勝川では、川船が唯一の交通手段で、渡船場は多くの人々ににぎわいました。戦後、橋の建設が進むと、渡船は急速に姿を消していきました。



第二期北海道拓殖計画（昭和2年～21年）時の十勝川治水計画平面図  
統内新水路計画が描かれています。

**治水計画の始まり、洪水とのたたかひ**  
開拓が始まって以来、十勝川流域では幾度となく大洪水に見舞われ、治水工事を求める人々の声は次第に強くなりました。大正に入ると、北海道全体の治水計画が定められ、十勝川においても洪水常襲地区の解消や未開墾地の開拓などの施策が具体化しました。そして、大正12年、十勝川治水事務所が創設され、住民悲願であった十勝川の改修工事が本格化することになります。  
昭和3年には、統内新水路事業が始まります。当時の統内地区は、洪水被害が最も多発していたところで、深い泥炭層からなる低湿地の不毛原野が広がっていました。  
この事業は、15・2kmもの新水路を建設する大規模なものでした。それまでの主流であった人力と馬力による工法では、大変な時間と労力を要することから、石狩川の治水工事で採用され始めていた機械が導入されました。導入された機械は、工事のスピードアップに大きく威力を発揮し、新水路は昭和12年に通水。これにより、洪水被害の軽減と不毛原野の開発促進につながりました。

規模の大きさもさることながら、土地の有効利用を視野に入れた治水事業は、当時としては大変画期的なものでした。

## 戦後の治水工事

昭和26年、北海道開発局が発足。以降、北海道総合開発計画と治水事業計画に基づいて、十勝川の主要区間の治水事業を担うようになります。

これまでに、護岸や堤防の整備をはじめ、洪水調節と発電を目的とする十勝ダム、農地の湿地化と生活環境の悪化を解消する浦幌十勝導水路など、流域の各地で治水上の安全を確保する事業を進めてきました。

## 人と川との調和をめざして

現在は、十勝川中下流部の流れを良くする千代田新水路緊急対策特定区間※や、軟弱地盤に適した丘陵堤の整備などを進めています。

こうした治水工事では、河川敷を誰もが心地よく、しかも利用しやすくするためのバリアフリー化を進めるとともに、河川の生態系や自然景観の保全にも配慮して、事業を進めています。  
また、地域の小学生や住民とともに堤防に植樹する「治水の杜づくり事業」や、環境学習の場となる「子供の水辺地域拠点センター」への支援などにも取り組んでいます。

※緊急対策特定区間 特に治水上の緊急性、必要性、整備効果等の高い区間のこと、期間を定めて重点的に整備を進めています。



**戦後間もない札内川の護岸工事**  
労働力、物資ともに極端に不足し、工事も応急措置程度のものでした。



十勝川流域図



**堤防の建設工事に活躍するブルドーザー**  
昭和40年ごろになると、様々な機械の導入が進み、機械が治水工事にかかせない存在になります。



**十勝ダム**  
十勝川の洪水調節と発電を目的に建設された流域内初の多目的ダムです。（昭和48年度着工、昭和59年度完成）



**浦幌十勝導水路**  
浦幌十勝川の流量を一定に保ち、下流域の湿地化を解消する導水路。十勝川の水を、下頃辺（したころべ）川経由で浦幌十勝川に流します。（昭和51年度掘削開始、昭和57年度通水）



**在来種の種を取る小学生**  
種は苗に育て、堤防に沿って植樹します。地元の人々とともに、洪水によるはらん被害を軽減させる樹林づくり（治水の杜づくり事業）を進めています。

# 「わが村は美しくー北海道」運動 第2回コンクールを開催します

北海道開発局では、「わが村は美しくー北海道」運動の一環として、「第2回コンクール（2004）」を開催します。このコンクールは、魅力のある地域づくりに関する住民主体の優れた取組を表彰することを通じて、活動団体を支援し、他地域へ広げていくことを目的としています。

なお、平成13年度から平成14年度にかけて実施した第1回コンクールでは、道内70市町村から126件の応募がありました。



「わが村は美しくー北海道」運動  
第2回コンクール(2004年)



喜びよう、広げよう、いいもの伝えよう。

★募集期間 平成16年4月1日～5月31日  
★募集対象  
北海道の農山漁村において、地域の活性化や個性的で魅力ある地域づくりに貢献している活動で、次のものが対象です。

| 景観部門                       | 地域特産物部門                               | 人の交流部門                                  |
|----------------------------|---------------------------------------|---|
|                            |                                       |   |
| 地域の特色を生かし、生活と生産に根ざした景観形成活動 | 地域で生産される農林水産物及びそれらを利用した主として加工品の生産販売活動 | 地域の魅力を高めるコミュニティづくりを行う、都市または他地域の人達との交流活動 |

★表彰 平成17年1月（予定）  
応募方法とコンクールの詳細は、ホームページでご覧になれます。  
[http://www.hkd.mlit.go.jp/topics/press/press\\_h1602/wagamura-concours.pdf](http://www.hkd.mlit.go.jp/topics/press/press_h1602/wagamura-concours.pdf)

お問い合わせ先  
農業水産部 農業振興課 電話011-709-2311（内線 5686）

## ピックアップ Pickup

### 道東を中心に各地で豪雪～通行確保に向け除雪に全力

平成16年1月13日夜から16日早朝と、2月22日から23日夜にかけての二度にわたり、北海道は非常に強い暴風雪に見舞われました。観測以来最高の積雪となった北見市をはじめ、道東の各地では記録的な大雪となり、道路の通行止めや飛行機の欠航、JRの運休など、各種交通機関に大きな影響がでました。

北海道開発局網走開発建設部と釧路開発建設部では、大雪で立ち往生した自動車や運転手の救出に当たるとともに、市街地や都市間をつなぐ幹線ルート、救急車や電気、ガスなどのライフラインを支える緊急車両のためのルート確保などを最優先に、24時間体制で除雪作業に当たりました。

また、並行して、道路情報板やインターネットなどにより通行止め区間や規制解除の情報をリアルタイムに提供しました。



1月中旬の大雪に伴う一般国道238号湧別町の除雪作業

### 丘珠空港の滑走路がリニューアル

丘珠空港（札幌飛行場）は防衛庁が管理する防衛と民間航空の共用飛行場です。札幌市中心部からの利便性が良いこともあり、札幌市と道内各地を結ぶ空港として重要な役割を果たしています。

北海道開発局では、平成12年度からYS-11型機の後継機（DHC-8型機）に対応した滑走路整備（1,400m→1,500m）等を進め、平成16年3月18日に供用を開始しました。同日、50名以上の関係者の出席のもと、滑走路完成記念式典を行いました。

滑走路を整備した丘珠空港（下）とDHC-8型機（右）



### 一般国道336号えりも町斜面崩壊

平成16年1月13日午後10時25分頃、落石の恐れのため通行止めとしていた、一般国道336号えりも町庶野の手遠別第1覆道広尾側坑口付近で、斜面崩壊が発生しました。崩壊した土砂は約4.2万m<sup>3</sup>におよび、職務中の職員1名が被災、死亡しました。

このため、崩壊箇所付近の2.4kmの区間は通行止めとなっていますが、住民生活への影響が大きいため、並行する区間で工事を実施している宇遠別トンネルを部分的に供用開始しました。なお、トンネル通行については、夜間は全面通行止め、日中は片側交互通行となります。また、高さ3.8m、幅2.5mを超える車両は通行できません。



開通に向けて工事が進められている宇遠別トンネル（左側のトンネル）

## えぞたぬき

某日、入局以来、懇意にさせていただいている先輩と昔話に花が咲いた。社会人になりたての純情な18歳の頃、生まれて初めて飲み屋に連れていってくれたのが先輩だった。それも「クラブ」。もちろん、飲み物はジュース（本当です）だった。今でも忘れられないことの一つ。この先輩が、4月で退職するという。仕事においても何かとご指導を受けていただけに、何とも寂しい思い。

高知の地方競馬にハルウララという8歳牝馬がいる。現在、106連敗中。負けても負けても走り続ける姿に人気沸騰。応援歌もでき、今やアイドルに。武豊騎手が騎乗したが、それでも負けた。今後とも元気に走り続けてほしいと願う。

勤務して30数年走り続けてきた自分も、あと数年を残すところとなったが、ハルウララを見習い、最後まで気力を持って頑張ろうと決意新たに。(S)

※今回の特集では、読者アンケートで要望が多かった釧路湿原での取組をとりあげました。開発グラフへのご感想お待ちしております。

## ひろば

は35号アンケート  
はがきより...

今月配布の紙面はどれも興味をもって読ませていただきました。特に開発事業のあゆみとしごと最前線は過去の思い出と現在の取り組みとして良かったと思います。

（穂別町 N・Aさん）

十勝沖地震の特集はとても興味深かったです。特に写真はとても生々しく印象が深いです。

（札幌市 S・Nさん）

「弾丸道路」の話は興味深く読みました。北海道の道路が整備された歴史の一コマだなどと思いました。

（福岡県 K・Iさん）

### 開発カレンダー 2004年4月～6月（ ）内は開催地

- 4月20日 滝野すずらん丘陵公園 春の開園
- 6月上旬 平成16年度第1回環境セミナー  
(札幌市 札幌第1合同庁舎)
- 6月19日 平成16年度天塩川水防公開演習  
(名寄市 天塩川左岸名寄大橋上流河川敷)

燃料電池と地下蓄熱技術を組合せた実証実験等の調査地域を募集します。詳しくは、ホームページをご覧ください。  
<http://www.hkd.mlit.go.jp/topics/chousaboshu/index.html>